書き抜き読書ノート 2552	2024 年 8 月 15 日

小室直樹著「歴史に観る日本の行く末、予言されていた現実！」青春出版社 1999 年 2 月 10 日刊を読む

Ⅰ

1．吉田松陰

「彼の眼中に、師弟なし、ただ明友あり」

「弟子に対しても、弟子あつかいせず、対等の友人として接した。小さな子供にも誰にも、全心を挙げて接した」

2．(1)「少年がある胸苦しい境目(さかいめ)を突破して青年に成ると、まるでちがった人間になる」

(2)これを「第 2 の誕生」という(ルソー)

これを「青春の一度限りの飛翔」という(シュテファン・ツヴァイク)

(3)「青春の飛翔」が行われると、きのうまでの、いとも稚(いとけ)なき子どもはすぐさま巨大な天才となる

○「飛翔」によって青年は一夜にして「世界精神(ヴェルト・ガイスト)、英雄に変身する」

3．(1)世の大人たちは、ここに気づくべきである。ここに「戒心(かいしん)」、「用心」すべきである。これこそ、青少年に臨む人の心意気である

(2)あなたの身辺に、ガロアの、ナポレオンの、レーニンの蛹(さなぎ)はいないのだろうか。いまはねむっているが、いったん飛翔して世界精神(ヴェルト・ガイスト)として結実するとき、いかなる「大人」よりもはるかに偉大となる

(3)これを常に念頭におくこと。これこそ、実に教育真髄である

P282 ～ 286

Ⅱ　松陰精神の神髄

1．松陰の学問の根幹は歴史である

(1)歴史に最大の関心をもっていた

(2)「歴史を読んで賢豪(けんごう)の事を観て志気を激発するに如(し)かず」(松陰の家言)

「世界精神(ヴェルト・ガイスト)」つまり、「英雄」のしたことをみてやる気をおこすべきである

(3)座標の軸は、歴史におく

2．(1)①どのような人にも、その人のよさを見ようとした

②すべての人が見捨てた人でも、松陰にかぎってその人の美質を発見する

(2)①「彼の人に接するや、全心を挙げて接す、彼の人を愛するや、全力を挙げて愛する」

②つねに全エネルギーを結集した

③行動的禁欲(aktive Askese)である

(3)①この人ならこのくらい教えておく、あの人ならあのていど教えておく、松陰は、絶対にこれをしなかった

②15、16の少年にも10才の童児にも、成人に教えるのと同じように教えた

③しかも、引照基準(いんしょうきじゅん)は、世界精神であり、松陰の観るところはその人の長所に集中する。相手をして、その手の舞い、足の踏む所を知らざらしむほどに志気(やる気)を鼓舞した

3．(1)①彼は、往々、インスピレーションのために精神的高潮に上る

②「而して、之を以て他に接し、他に導いてこの高潮に達せしむ」

③「ただ、己(おのれ)が真骨頂(しんこっちょう)、大本領を述べて、以て、これを他に及ぼすのみ」

○「自分のすべてを相手にぶつける」こと

(2)①松陰の真骨頂、大本領とは何か

②松陰は、常に死ぬつもりでいた

③死ぬことの教育こそ、まさに教育の大本領である

(3)①松陰は尊敬する師の佐久間象山に手紙を書いて質問して、最後に「丈夫(じょうぶ)の死所、何(いず)れの処(ところ)か最も当らん」と結んでいる

②「どこで死ぬか」これこそ、武士にとって一番大切なことである。青春期(思春期)の若者にとって、死は切実な問題である

③死に関する若者の気持ちが大人に通じることはない

P288 ～ 290

「伝統主義」の定義

(1)「過去にやった、あるいは過去に行われたという、ただそのことだけで、将来における自分たちの行動の基準にしようとするエトス」(マックス・ヴェーバーの定義)

(2)「伝統を尊重する」定義という意味ではない

(3)どんな社会でも伝統をもつが、「わるい伝統」はすて、「よい伝統」は存在されるという合理的選択がある場合には、「伝統主義」とはいわない

(4)「伝統主義」の否定から近代資本主義は生まれる

P32

「エトス」の定義

(1)基本的行動様式

(2)英語ではエシック(ethic)という

(3)倫理(ethics)よりも一般的な行動様式で

(4)倫理を内面から支える意識および無意識のこと

P32

＜コメント＞

日本の教育の原点の一つは「吉田松陰」先生。じっくりご研究ください。

2024年8月15日(木)

林　　明　夫